

芥川龍之介と日本自然主義：小説中の自然主義表象 およびその変遷

陳丁，颺颺

<https://hdl.handle.net/2324/7182555>

出版情報：Kyushu University, 2023, 博士（学術），課程博士
バージョン：
権利関係：



氏 名	陳丁 颯颯			
論 文 名	芥川龍之介と日本自然主義—小説中の自然主義表象およびその変遷—			
論文調査委員	主 査	九州大学	教授	松本 常彦
	副 査	九州大学	教授	波瀾 剛
	副 査	九州大学	講師	松枝 佳奈
	副 査	専修大学元教授		高橋 龍夫
	副 査	フェリス学院大学名誉教授		宮坂 覺

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、芥川龍之介と自然主義の関係性の変遷を用例の網羅的検討によって全体像を整理し、初期から晩期に至る諸作品における関連記述の含意を具体的に検証している。

論文の概要は、次の通りである。

序章では、問題設定の背景と理由、論文の目的と意義、先行研究の整理、論文の構成と概要を記す。芥川の「自然主義嫌い」という通念が研究にも影響し、それは芥川文学の理解を単純化すると指摘し、そうした状況の確認を兼ねて先行研究を丁寧に整理紹介した上で、芥川と自然主義との関係という問題を芥川文学全体の文脈の中で検討する必要を説く。論文の構成と概要では、そのための全体像と各論のポイントが示される。

第一章では、芥川の自然主義に関連する直接的な語彙、また、自然主義の作家や作品や批評など自然主義関係の記述が網羅的に採取され、逐年的に整理した図表を示しつつ、年次ごとの量的な変化と記述内容から、全体が三期（批判と客観的姿勢との均衡、批判的姿勢の優勢、客観的姿勢の優勢）に区分されるとする。また、そうした検討を通じて、芥川には明治末期の自然主義以前と以後というかたちの文壇史観があることなどが確認される。

第二章では、第一章の把握を踏まえ、これまでの先行研究では、自然主義との関係が意識されてこなかった作品「酒虫」（1916）を、明治末期の自然主義の余波が残る時期の作品として捉え直す。作中の「醜い自我」をめぐる問題は、自然主義的な問題としても系譜化が可能であるとし、作品末尾に並記された三つの解釈は、「大正八年度の文芸界」（1919）などで語られた自然主義と唯美主義と人道主義の鼎立という芥川の文壇の見取り図と呼応することを指摘する。自然主義との関係から作品を捉え直すことで、作品の新たな解釈を提示する内容となっている。

第三章では、広津和郎への一時的反発と解されがちな「MENSURA ZOILI」（1917）について、作品の諷刺性は、そうした限定的で一時的なものではなく、自然主義文学に対する新興の文学的立場に立つ自身の姿勢を示す作品として考察する。具体的には、作品の典拠がアリストファネス「蛙」であることを実証的に確定し、その作意に諧謔文学の系譜が意識されていることを明らかにした上で、船旅やゾイロスや価値測定器などの典拠に由来する記述が、同時代の自然派を中心とした文芸批評の記述と呼応することを確認し、作品が単純な寓意小説にとどまらない含意や含蓄や諷刺性を持つことを明らかにしている。

第四章では、芥川の自然主義についての言及が多い時期に発表された「毛利先生」（1919）、「あの頃の自分の事」（1919）、「樗牛の事」（1919）のいずれもが、「時代」という問題と深く関係する

記述を内包すること、また、それらの記述が過去を押し流す時代の力を焦点化することを確認する。さらに、そうした「時代」の含意が、同時期の「大正八年度の文芸界」や「大正九年度の文芸界」（1920）における自然主義評価と呼応することを指摘し、そうした相同性を踏まえ、この時期の「時代」表現の背景に、文壇のパラダイムチェンジが潜むことを読み取っている。

第五章では、「葱」（1920）における『藤村詩集』、モデル問題、文芸批評、「幻滅」などの構成要素が、いずれも自然主義文学でも問題になる要素であることを指摘し、そうした共有関係から本作の諷刺性を解釈する。上記の構成要素は、当時の読者が本作を読む際には一種のコードとして機能するが、作品の諷刺性は、そのコードを逆手にとった筆法にあり、それによって自然主義陣営の批評家を批判しているという解釈を提起する。

第六章では、生前最後の発表作にもかかわらず、軍艦を擬人化した特異な作品であるため、研究史も手薄であった「三つの窓」（1927）を自然主義との関係から再読する。本論文が注目したのは、中心人物に「自然主義の作家になることを空想してゐた」K少尉を設定し、その人物が好んだ句が「君看双眼色 不語似無愁」であった点である。同句は『禅林句集』に由来するが、芥川が第一短編集『羅生門』劈頭に掲げた芥川文学を象徴する句である。そうした設定の含意を、芥川の実験機関学校時代の実体験や国木田独歩や正宗白鳥に対する芥川発言との関係から読み解くことで、芥川と自然主義との対抗的な結託を抉り出している。

終章では、上記各論の内容を要約的に整理することで、芥川と自然主義との関係の変遷や関係性の基軸が対抗的な結託にあることを確認している。その上で、そうした結論の具体的事例として芥川と島崎藤村との関係を検討し、関係性の時期的変化と対抗的な結託関係を再確認することで、結論を補強している。

なお、芥川が用いた自然主義や自然派など関係語彙の一覧（A4用紙43頁分）と芥川の記述における自然主義作家や自然主義作品の一覧（A4用紙49頁分）の図表、参考文献一覧など、いずれも質量とも行き届いたデータが付されている。

本論文は、先行研究では、相互に否定的な関係として把握されることが通例であった芥川と自然主義との関係について、作成したデータおよび個別作品の読解を通じて再考すべき論点が多々あること、および、ポスト自然主義としての大正期文学における芥川と自然主義との対抗的な結託関係を作品読解の次元で具体的に論証しており、芥川と自然主義という問題について総体的な見取り図を描く点で画期的である。今後の芥川研究にも十分に寄与する学位論文として意義がある。

以上により、論文調査委員会では全員一致で地球社会統合科学府の博士（学術）学位に値すると判断した。